

《書評》

『戦艦大和の歴史社会学：軍事技術と日本の自画像』

塚原真梨佳 * 著、新曜社、2025 年

塚田 修一 †

緻密な構成と過不足のない記述

本書は、旧日本海軍の戦艦大和が、戦後日本社会において、いかにして（ただの）兵器としての意味づけを超え、「民族の誇り」や「科学技術立国の礎」という意味を付与されていったのかを、雑誌資料の分析を通して明らかにするものである。

まず評価されるべきは、本書の緻密な構成と過不足のない記述である。本書の章構成は以下の通りである。

- 序章 旧軍の記憶と科学技術立国ニッポンの自画像
- 第1章 「ナショナルなもの」としての戦艦
- 第2章 戦争のコメモレーションとしての戦艦
- 第3章 敗戦国日本はいかに戦艦大和を発見したか
- 第4章 旧軍技術から平和技術へ
- 第5章 「大和＝科学技術立国の礎」論の退潮
- 第6章 「第二の敗戦」と戦艦大和
- 第7章 地方における「大和＝科学技術立国の礎」論の展開
- 終章 平和日本の礎としての軍事技術

特に構成が卓越しているのが序章から第6章である。序章で本書の問題意識が記述され、第1章・第2章で、「戦艦」に分析の照準を合わせていく。第3章から第6章まで、雑誌『丸』を主な分析対象として、敗戦から高度成長期を経て低成長期に至るまで、日本社会が「戦艦大和」といかなる関係を取り結んできたかがクロニクルに——歴史社会的に——論じられる。

そして、いずれの章においても、特にアカデミアの読者が抱きそうな疑問、というかツツコミに対し、先回りして解答を与えながら記述が進む。本書がなぜ「戦艦」に着目するのか、なぜ「大和」を対象とするのか、なぜ「テクノ・ナショナリズム」という視座を選択するのか、なぜ雑誌『丸』を分析対象とするのか——。これら「なぜ〇〇なのか」という疑問に対し、明快な解答が与えられていくのである。そうした記述には過不足がないことも指摘しておかなければならない。これは評者だけなのかもしれないが、歴史的な記述に際しては、つい、「この史料も盛り込みたい」とか、「あのエピソード

* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構 専門研究員

† 相模女子大学学芸学部 准教授

s-tsukada@star.sagami-wu.ac.jp

ども組み込みたい」という誘惑に駆られてしまい、過剰な記述になりがちである。本書の記述はそうした誘惑に屈することなく、論証に必要な十分なものになっている。

こうした緻密な構成と、過不足のない記述は、おそらくは著者にとって恵まれた教育・研究環境——指導教員や研究仲間といった——と、トレーニングの賜物であろう。言うまでもなくこうした構成力や記述力は一朝一夕に身につかないし、孤独な研究環境の中で習得できるものでもないからである。——もしもこれらが全て著者の独力によるものならば、降参するしかない。

本書による発見

次に、本書がいくつかの重要な発見をしていることも評価されなければならない。本書がおこなった発見について、いくつか挙げておこう。

まず、「戦艦大和は科学技術の結晶」という大和イメージの誕生と、そのイメージ／言説が、「戦績」と「技術」とを（ある意味で都合よく）切り離すことによって成立していたという指摘（第3章）。また、1970年代から80年代に、『丸』誌上において戦艦大和をめぐるテクノ・ナショナリズム言説が後景化した要因について、『丸』誌に内在的に、そして外在的にも、説得力のある説明をしていること（第5章）。さらに、1980年代の低成長期において、戦艦大和のテクノ・ナショナリズム言説が、ビジネス誌において延命していくことの指摘（第6章）である。

本書についての先行研究は拙稿（塚田 2013）およびノ瀬（2015）であるが、それらは本書によって完全に乗り越えられたことを認めなければならない。

そして本書を読み終えた読者は、本書が明示的には設定していない問い——しかし、多くの読者が頭の中に浮かべ、その解答を期待してしまう問い——への解答を得ることになる。その問いとは、「なぜ戦艦大和は現在に至るまで人々を魅惑し続けているのか」というものである。それに対する本書の解答は明快である。「戦艦大和こそが戦後日本社会の自画像であり続けてきたから」だ。

「じゃないほう」への展開可能性

以上の評価に加え、本書が有している可能性について考えてみたい。先に評価したように、本書の「なぜ〇〇なのか」に対し解答を与えながら進む記述は、議論をクリアにしている。そして、学術論文においてはその記述を採るのが正解である。ただ、逆にいえば、それは「〇〇じゃないほう」への展開に禁欲的になってしまうことでもある。

「〇〇じゃないほう」への展開とは、たとえば本書の議論を「戦艦ではないもの（兵器）」や「大和ではない戦艦」に接続したり、さらには「テクノ・ナショナリズムではない視座」や「『丸』ではないメディア言説」に着目したりすることである。

本書の後には、こうした「じゃないほう」に展開する可能性を考える段階に行ってよいのではないか。——その意味では、評者が本書の中でより魅力を感じた章が、第6章と第7章である。この二つの章は、それまでの章とやや肌理が異なる。第6章では、先述したように、前章まで一貫して検討されてきた雑誌『丸』ではなく、ビジネス雑誌が分析の俎上に載せられている。また第7章では、呉市という地方都市において、戦艦大和をめぐるローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティが結びついていく過程が描かれる。つまり、この章においては、歴史社会学というよりは地域社会論が展開されている。

したがって、この二つの章は、はじめに評価した「緻密な構成」——雑誌『丸』を資料とした歴史

社会学——からは、やや外れることになる。だからであろうか、著者はこの二章の位置づけに少々手を焼いている——「外れ」として持て余している——ようにも見える。実際、本書全体の議論と知見をまとめている終章では、この二つの章について言及されていない。もちろん、他の章が学会誌に掲載された論文がベースになっているのに対し、この二章が書き下ろしであることも大きいのだろう。

しかし、評者がこの「外れ」た二つの章に魅力を感じるのは、それらが「〇〇じゃないほう」としての可能性を見せてくれているからだ。本書は（もしかすると無自覚に）すでに「〇〇じゃないほう」にも入り込んでいるのである。だから、この二章を「外れ」として持て余す必要はない。思い切って「じゃないほう」へ舵を切ってよいのだ。

そうしてこそ、本書の可能性が引き出されるはずである。

参考文献

一ノ瀬俊也（2015）『戦艦大和講義：私たちにとって太平洋戦争とは何か』人文書院。

塚田修一（2013）「文化ナショナリズムとしての戦艦『大和』言説：大和・ヤマト・やまと」『三田社会学』第18号。